

## みことばを信じる人の幸い

ルカ 1 : 39~45

アドベント（待降節）に入りました。クリスマスが近づくと、クリスマスの曲をよく耳にします。私は高校生の時に初めてキリスト教会に行きました。それまではクリスマスになるとジングルベルやホワイトクリスマス、それに「聖しこの夜」や「諸人こぞりて」の讃美歌も耳にしていましたが頭の中はごちゃごちゃで、とにかく 12 月になるとクリスマスのいろんな歌が聞こえて、「何かプレゼントがお正月前にもらえる」というレベルでした。そう言えば小学校の頃、お菓子の入った銀色の紙で作った靴をプレゼントにもらって中のお菓子を食べたところ、すぐにお菓子は無くなって、紙の塊ばかり出てきて、がっかりしたことを思い出します。何せ、育ったのは田舎ですし、家の裏はお寺、一件空けて左隣がお寺という土地柄ですからキリスト教とは無縁な中で育ちました。高校生によるクリスマス会、つまり初めて教会でのクリスマス会に出た時に思ったことは「教会でもクリスマスをお祝いするんや」ということでした。（笑）しかし、それ以来、毎年クリスマスは美しい賛美が聞こえてきたり、賛美出来る喜びの時期だなといつも感激を覚えます。また、この時期にはイエスの母マリアのことも歌われますね。「アヴェ・マリア」はその代表的なものです。歌の内容は御使いガブリエルからマリアが受胎告知の知らせを受けるところと今日の箇所でもマリアが叔母エリサベツを訪問した際、エリサベツからマリアが祝福を受けたことが歌われています。

## 1) マリアの訪問

マリアが訪ねたエリサベツは祭司ザカリヤの妻で、マリアにとっては叔母にあたる人です。彼女には長い間子どもが与えられませんでした。高齢になって、子を産むことをあきらめていたときに、夫ザカリヤに御使いが現れ、こう告げました。「あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。」「その子は主の御前に大いなる者となるからです。」（ルカ 1:13,15）その言葉の通り、エリサベツは子どもを宿しました。彼女は大事をとって五ヶ月の間家にひきこもり、六ヶ月目を迎えました。そのときエリサベツは、出産までの間、身の回りの世話をしてくれる人を必要としていました。エリサベツの身近には、出産や育児を経験した女性たちが大勢いて、彼女を助けることができたはずですが、ところが、彼女は、そうした人を選ばず、遠くの、しかも、未婚のマリアを選びました。なぜでしょうか。それはエリサベツがマリアを選んだことには神の特別な導きと聖霊の示しがあったからです。

41 節に「エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。」とありますが、エリサベツが聖霊の働きを受けたのは、このときがはじめてではありません。エリサベツは 4 ヶ月から 5 ヶ月して胎児が動くのを感じるようになったころから、神の言葉を実現させる神の力を身をもって体験し、聖霊によって神との深い交わりに導かれていきました。24 節で「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言っています。

エリサベツの妊娠六ヶ月目というのは、ちょうどマリアが、イエスを身ごもるという御使いのお告げを受けた時でした。すでにエリサベツは、マリアが救い主イエスの母として選ばれたことを、聖霊の示しによって知っていました。エリサベツの子ヨハネには、生まれる前から救い主に仕えるという務めが与えられていることも、エリサベツには示されていたので、エリサベツはぜひとも、わが子が仕えるようになる救い主の母となるマリアに会いたいと願って来てもらったのでしょう。

このように神様のご計画はエリサベツを通して着々と進められていました。また別の場所ではマリアを通して着々と進められていたのです。それぞれに思いも寄らない方法で神様はご計画を進めて下さっていたのです。さらに言うなら、御子イエス様が処女マリヤから生まれるということは何百年も前に聖書に預言されていたことなのです。今年のみことば「信じる者には神がすべてのことを働かせて益とさせていただきます」の通り、あなたのための計画が動いていること、働いていることを覚えて主の御名を崇めたいと思います。

## 2) エリサベツの祝福

さて、エリサベツを訪ね、その門をくぐったマリアはまず、自分のほうから丁寧に挨拶をしました（40 節）。ところが、エリサベツから返ってきた言葉は、「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。」でした（42、43 節）。古代には、年上、年下の区別がはっきりしていました。年下の人は年上の人を敬い、年上の人は年下の人にはそんなに丁寧に接しませんでした。ところが、エリサベツは、自分の子どもほどの年齢の若いマリアを「私の主の母」と呼んで、マリアに自分の母親に対するような尊敬を表したのです。考えてみてください。エリサベツは 18 節で夫ザカリヤが「私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」と言っています。この「もう」は「十分」という意味です。少なくとも 60 歳ぐらいにはなっていたでしょう。かたやマリアは当時の結婚する女性は 15 歳前後と言われているからそれぐらいの年齢です。ですから少し前まではエリサベツは「マリアちゃん、マリアちゃん」と呼び、マリアは「エリサベツおばさん、おばちゃん」と言っていたのです。ところがこの時、エリサベツとマリアの立場が入れ替わることになりました。

どうしてそんなことが起こったのでしょうか？ エリサベツにとって最も大切なお方は主です。その主が人となり、処女マリアを母として、この世に生まれ出ようとしているのです。エリサベツは、主を「私の主」として崇める人でした。それで、その主の母となるマリアを、自分の「姪」としてではなく、「主の母」として敬ったのです。

「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」42 節 ここで、エリサベツは二度「祝福されている」という言葉を使っています。この言葉には二重の意味があります。人に対して使われる時には、「祝福がありますように」という意味になりますが、神に対して用いられるときは、神を「崇めます」、「礼拝します」、「ほめたたえます」という意味になります。ですから、最初の「あなたは女の中で最も祝福された方」というのは、マリアを祝福している言葉ですが、次の「あなたの胎の実も祝福されています」というところは、マリアに宿っておられるイエスこそ、「祝福されるべきお方」「崇められるべきお方」、主であるという意味になります。イエスが「祝福されている」「祝福に満ちている」というのは、イエスが私たちの礼拝を受けるべき神であることを言っています。マリアが受けた祝福は、彼女の胎内にいる「祝福に満ちたお方」からの祝福だったのです。エリサベツは、その祝福を認めて、マリアを「祝福された人よ」と呼び、彼女の胎内に宿られたイエスを「祝福されるべきお方」として崇めたのです。

## 3) 祝福の秘訣

神の御子の母となるという祝福は、後にも先にも、マリアにだけ与えられたもので、特別なことの中のに特別なことです。では、マリアへの「受胎告知」やマリアの「エリサベツ訪問」は、マリアにとっては大切なことであっても、現代の私たちには当てはまらないものなののでしょうか。いいえ、聖書は、神を信じる者がマリアのように「祝福された人」になることができると告げており、その秘訣を教えています。それは、45 節の「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」という言葉です。

マリアの祝福、幸いはどこから来ているのでしょうか？ それは神の言葉からです。マリアの祝福は神の言葉にまごころをもって耳を傾け、それを信じ、受け入れたことから来たのです。聖書は、いたるところで、祝福された人生、幸いな生活を神の言葉と結びつけています。詩篇 1:1-2 には「幸いなことよ。悪しき者のはかりごとにと歩まず罪人の道に立たず嘲る者の座に着かない人。主のおしえを喜びとし昼も夜もそのおしえを口ずさむ人。」とあり、詩篇 119:1-2 には「幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえに歩む人々。幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を求める人々」とあります。箴言

16:20 には「みことばによく通じた者は幸いを見出す。主に拠り頼む者は幸いである」と言われています。

あるとき、イエスの教えに感動したひとりの女性が「あなたが宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです」と言いました。それは「こんなに素晴らしい人物を産んだ母親はなんと素晴らしいことでしょうか」という意味です。イエスの母がうらやましいと思ったのでしょうか。しかし、イエスはそれに対してこう答えました。「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」(ルカ 11:27-28)

また、あるとき、イエスが人々を教えておられるとき、母マリアと兄弟たちがイエスに会いに来ましたが、大勢の人のために、イエスに近づくことができませんでした。それで、弟子のひとりがイエスに「母上と兄弟方が、お会いしたいと外に立っておられます。」と告げました。そのとき、イエスはこう言われたのです。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行なう人たちのことです。」(ルカ 8:19-21) こうした言葉は、イエスが母や兄弟たちに対して冷たい態度をとったように聞こえますが、決してそうではありません。イエスは母マリアが、他の誰よりも「神のことばを聞いてそれを行う人」であることを知っていました。イエスの兄弟たちも、最初はイエスに反対していましたが、イエスの復活のちは、信仰を持ち、教会の一員に加えられています(使徒 1:14)。

人の本当の幸いは、御言葉を聞いて、信じることにあるのです。皆さんは、この幸いを体験しているでしょうか。神の言葉はいつでも、「そうだ、その通りだ」と理解できるものばかりとは限りません。エリサベツの夫ザカリヤは、エリサベツに子が生まれるという知らせを聞いたとき、「そんなことがあるだろうか」と疑ってしまいました。私たちも自分の小さな知恵や経験だけで神の言葉を推し量って、神のみこころの大きさを見ないことがあります。また、聖書を教訓の言葉と読むだけで、「自分にはこんなことはできない」、「今度も、神の言葉を守ることができなかった」と落胆してしまうこともあります。聖書には確かに戒めがあり命令があります。しかし、それがすべてではありません。その戒めを守れず、命令に従うことのできない私たちの罪を赦し、受け入れ、強め、恵んでくださるという「よい知らせ」(福音)や約束の言葉で満ちているのです。神は、あなたを救う、赦す、癒やす、守る、あなたと共にいて、あなたを祝福する、万事を益とすると約束しておられます。たとえよく理解できなくても、目に見える状況が約束の言葉とは正反対のようであっても、神の言葉を信じましょう。それに頼りましょう。神の祝福と幸いはみことばを信じる人に訪れるのです。祈ります。